

アンソニー・ギデンズ 『社会理論の現代像』

宮島喬他訳・みすず書房・1986年・4,000円

原題:Studies In Social And Political Theory
Hutchinson & Co. (Publishers)Ltd, London, 1977

松岡秀明

本書の著者アンソニー・ギデンズは、現代における社会および政治理論を探究すると同時に、初めての著作である *Capitalism and Modern Social Theory: An analysis of the writing of Marx, Durkheim and Max Weber*, London, 1971. (邦訳『資本主義と近代社会理論』, 研究社, 1974) 以来、社会学の古典理論を検討する作業を精力的に行ってきたイギリスの社会学者で、本書は主として70年代に書かれた彼の論文を纏めたものである。目次を追ってみると、序論 今日社会科学におけるいくつかの争

点、第一章 機能主義—戦いを終えて、第二章 ハーバーマスの解釈学批判、第三章 解釈学・エスノメソドロジー・解釈学的分析の問題、第四章 マルクス、ウェーバーと資本主義の発展、第五章 社会思想史における4つの神話、第六章 デュルケムの政治社会学、第七章 デュルケムの著作における「個人」、第八章 自殺の一理論、第九章 タルコット・パーソンズの著作における「権力」であり、本書は極めて広い範囲を扱っている。(なお、原書第一章の「実証主義とその批判」は、最初に掲載された論文集が現在邦訳

中という理由で割愛されている。)

序論においてギデンズは、本書に含まれる諸論文の性格は社会理論の古典—19世紀中葉から第一次大戦までのヨーロッパのそれをさす—を検討するということであると述べている。本書にはパーソンズやエスノメソドロジーを主題とする論文が収められているために、この発言はいささか奇妙に聞こえるかもしれない。しかし、ギデンズの用意周到な方法を見ると納得がゆく。ギデンズは、歴史的背景および思想的伝統という「地」を丹念に検証し、ある社会理論の姿をその「地」のうえに「図」として浮かび上がらせる。そしてその理論の可能性と限界を検討するという方法をとっている。それゆえ、エスノメソドロジーを論ずる場合でも、まずエスノメソドロジーを解釈学の伝統のなかに位置づけ、ウェーバーの理解社会学とは対立するものと把握したうえで細かな検討を行なうのである。

さて、ギデンズが諸先達や同時代の社会理論を解説する際、クライテリアとなるのは彼がその構造化理論 (theory of structuration) を構築する契機となる根本的な問い—いかにして個人が能動的な行為の主体となりうるか—である。本理論は、*The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, London, 1984 でさらに詳細に展開されており、本書においては第一章の「機能主義—戦いを終えて」とその補論である「構造化の理論についてのノート」で論じられているに過ぎない。しかしながら、本書の随所にこの問いからの眼差しによる鋭くそして新鮮な分析が認められるのである。

それでは構造化理論とはいかなるものか。それは先に述べたように、いかにして個人が能動的な行為の主体になりうるかを分析するための理論であるのだが、その詳細を本書から把握するのは必ずしも容易ではない。ギデンズの説を要約すれば以下ようになる。主意主義あるいは決定論のいずれに与するにせよ、ほとんどの社会理論は「構造」を「拘束」と同一視して「行為」に対立するものとして把握している。しかし、これでは「認識

する主体」の「行為」を十全に分析することはできない。そこで、「構造の二重性」という概念を導入する。相互行為によって生ずる構造が、再生産される構造の媒介となる。この思考法は、機能主義に典型的な静的/動的、機能的/歴史的といった二元論とは完全に訣別している。(評者の理解では、構造の二重性はソシュールのラング/パロールの概念と近いものとおもわれる。)

本書が扱う領域は広範であって、すべての論文について考察することは評者の力を越えている。そこで、評者の関心に引き付けてデュルケムに関する論考を検討してみたいと思う。本書の9章のうち5, 6, 7の3つの章がデュルケムを主題としている。さらに第8章の「自殺の一理論」も、その前半は『自殺論』を論じており、本書のかなりの部分がデュルケムに充てられている。

70年代に入って、ギデンズやステューブン・ルークス (*Emile Durkheim; His Life and Work*, London, 1973)ら为先駆けとして、デュルケムは再び注目されるようになり多くの論文や著作がものされて、いわゆるデュルケム・ルネッサンスと呼ばれる活況を呈するが、この運動の一つの動機として先行するパーソンズ、アルパート、そしてニスベットのデュルケム解釈に対する見直しがある。ギデンズは、機能主義を一方の叩き台として構造化理論を構築しているために、これまで機能主義者が見落としてきたデュルケムの側面が明らかにされる。

第5章では、デュルケムをめぐる「神話」が分析される。

(1) デュルケムは、西洋の社会哲学に深い根をもつ抽象的な「秩序の問題」の解決を試みたとする通説に対して、デュルケムは「社会の変動」を考えていたのだとギデンズは主張する。

(2) デュルケムとそれ以前の社会思想の間には「大きな亀裂」があるとする通説に対しては、ギデンズはコントやスペンサーとの連続性を提示する。

第6, 7章に共通する姿勢は『分業論』の

積極的評価である。ギデنزが「もっとも影響力が大きい」としたとする、パーソンズのデュルケム解釈—『社会的行為の構造』に示されたそれ—によれば、デュルケムの思想は「実証主義的」性格（『分業論』や『社会学的方法の基準』）から「理念主義的」性格へと変化した。これに対してギデنزは、デュルケムは『分業論』以降、つねに機械的連帯と有機的連帯の区別のうえに論を展開している、と主張する。すなわち、機械的連帯が失われた産業社会においていかにして共同性を維持するか。これこそがデュルケムが生涯にわたり探求していた主題のひとつである。この観点からギデنزは、パーソンズの解釈では過少評価されてきた『分業論』を評価していく。ギデنزによれば、『分業論』においてデュルケムがこの問いに対して提出した回答は道徳的個人主義であり、第6章では近代国家の道徳的役割を、第7章では功利主義的個人主義との対比を描き出している。そして、『原初形態』もこのような眼でみると、道徳的個人主義を出現させたプロセスを理解するための基礎を提供してくれる、と述べる。

一方、ギデنزはデュルケムの諸著作に見られるディテールの欠如を批判する。分業が特定の政治形態と結びつく際の諸条件を明らかにしていない、また、「個人」が「社会」とどのような関係を持っているのかが不明確だ、と。

本書を構成する諸論文はギデنز自らが序文で言明しているように「他のより大きい仕事との関連によって書かれたもの」であり、一冊の書物としてみると同様の主張が繰り返されており、やや散漫な感がある。また各論文が短いゆえに、「詳細を欠く」というギデنزのデュルケムに対して行なった批判がそのままギデنزの論文にも該当する箇所も認

められよう。その意味では、ギデنزにデュルケムについての大きな著作を纏めてほしいと願うのは評者一人ではあるまい。また、対象の広さは、本書が教科書的な性質のものではないかという印象を与えるきらいがあるろう。

構造化理論の基盤にある「能動的主体」がいかに社会と関係を持つかという問い自体は特に目新しいものではないが、社会理論を分析する際には有効である。その結果が本書に結実している訳だが、社会理論ではなく具体的社会現象を対象とした論文（第8章 自殺の理論）が表面的な分析に終始しているのはどうしたことか。 *The Constitution of Society* も理論的な著作である。具体的な社会現象の研究にどれだけ有効かを提示できなければ、構造化理論はお題目に終わるのである。

以上のように問題点は残るが、自らの立場を明確にしつつ社会理論を分析するというギデنزの作業には共感をおぼえる。また、本書で示されたデュルケムの解釈は、方法論に対する批判以上に魅力的である。基本的には機能主義を叩き台にして、これまでのデュルケム理解を脱神話化する手並は鮮かで、デュルケムが抱えてきたにも関わらずこれまで等閑に付されてきた個人主義や国家といった問題が明らかにされている。同時に、より大きな流れの中にデュルケムが位置づけられる。デュルケム・ルネッサンスの成果はほとんど邦訳されておらず、その点に限ってみても本書の出版は意義あるものである。

最後に、訳文に対して苦言を呈しておきたい。ギデنزの原文は明析で平易なものであるが、本書の文体は（共訳であるために程度の差はあるが）概して生硬で難解なものとなっており、残念である。